

【論 文】

生成文法？ 認知文法？ それとも…？⁽¹⁾

高 橋 直 彦

0. 摘 要

タイトルは大上段に構えたものの、本論考は文法理論についてささやかなコメントを加えるという趣旨のものである。具体的には、とかく対立的な2大陣営と捉えられがちな生成文法と認知文法とが、(i) 実は双方の主張が——「流儀の違い」といったレベルを超えて——齟齬をきたしたままそもそも議論がかみ合っていない（し、かつそのことを双方が自覚していないのではないかと疑われる）部分があること、(ii) そうした齟齬を解消する枠組の候補としてひな形方式が有力であること、の2点を中心に論ずる。

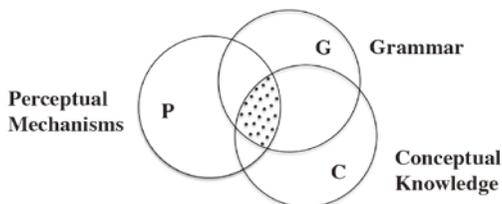
1. モジュール性に関する見解の相違

まず、言語がモジュール性によって規定されるか否かに関する見解について検討する。この点に関して生成文法（Chomsky（1975）等）対（生成意味論（Lakoff（1971）等）や）認知文法（Langacker（2008）等）は際立った対照を示す。概略的に言うなら、生成文法は文法内外のモジュール性を前提とした理論構築を行うのに対して、（生成意味論や）認知文法はモジュール性に関しては否定的な立場に立脚する。

しかし、結論から言うなら、この点に関する両陣営の立論には共に不備があると言わざるを得ない。例えば、生成文法の概説書である Lightfoot（1976：42ff）は以下のような図式を用いてモジュール性の説明を行っている。（1）—（2）を参照されたい。

⁽¹⁾ 本論考の内容は、一部、教養学部サロン（2014年5月29日、於東北学院大学教養学部）で行った口頭発表「ひな形方式ってな～に？——先入観を捨てよう——」に基づいている。発表当日ご質問や貴重なコメントをくださった皆様に感謝申し上げます。また、本論考で使用した図のスクリーン絡みで、東北学院大学教養学部言語文化事務室の木村久美子さんにお手数をお掛けしました。併せて謝意を表します。

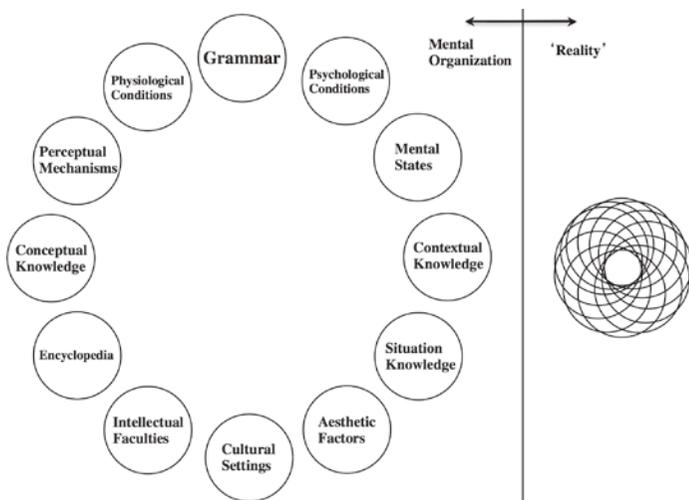
(1)



- (2) a. [[that [that [that [the moon is bright]] is obvious] disturbs me] surprised Harry]
 b. Colorless green ideas sleep furiously.

(2a) に類する文は、文法および認知知識の領域では適正とされるけれども知覚処理機構の点で基本的に処理不能とされる埋め込み構造の例である。(2b) は有名な Chomsky (1957) の例であり、文法および知覚処理機構の点では適正とされるけれども認知知識の領域で基本的に不適格とされる例である。また、(1) で 3 モジュールが交差する領域は、文法・知覚処理機構・認知知識の 3 領域で適格とされる例（無数にある）である。モジュール間のこうした関係を表す図として (1) は一見分かりやすく明快ではあるのだが、しかし、(1) のような図式化は生成文法の陣営の考え方を示す図としては厳密に言うなら誤解を招くものである。なぜならば、個々のモジュールの自律性を真に謳う図式化は以下の図の左側のように表される筈のものだからである。

(3)



(3) の図式化はあくまで模式図であることを前提の上で話を進めることにするが、賢明な読者なら既にお気付きであろう。然り。「モジュール性」を強調する生成文法の陣営は図の左側の（良くも悪くも）抽象的な「Mental Organization」レベルを云々しているのに対して、

認知文法の陣営は図の右側の（良くも悪くも）実現形に近い「Reality」レベルを云々しているのである。そしてここで重要な点は、「Reality」ということと言うなら、実は左側も右側も共に「Reality」を有しているのであって、ただ「Reality」という言葉の適用されるレベルが異なる——つまり、左側は抽象的なレベルの「Reality」を有し、右側は実現形に近いレベルの「Reality」を有している——ということに他ならないという点である。即ち、この点に関して言えば、両陣営は軸足を異にしている水掛け論だということになる。例えば、吉村（編）（2003：81）は生成文法を評して、「言語運用のレベルでの理論やモデルを無視して言語能力レベルでの理論やモデルを構築しようとするのは、2階のない建物に3階を建てつけようとするようなものである。」と述べているが、この批判は、生成文法の陣営からは「言語能力のレベルでの理論やモデルを無視して言語運用レベルでの理論やモデルを構築しようとするのは、2階のない建物に3階を建てつけようとするようなものである。」という反論を受けること必定である。どっちもどっちである。

因みに、くどいが、(3)の図式化はあくまで模式図である。筆者は、左側のモジュールに関してこれで必要十分だなどと主張するつもりは毛頭ないし、右側に関しても、個々のモジュールの「重なり方」は実際には文法ごとに区々であろうと考える。例えば、モジュールの「重なり方」の違いに関して以下を参照されたい。

- (2) a'. [[[[[月が明るい] ということ] は明らかであるということ] が僕にとってはイライラの種だということ] がハリーにとっては驚きであった]

(2a)に対応する（Lightfootでは挙げられていない）この日本語文は(2a)と異なり(1)の3モジュールが交差する領域で適格である。この違いは日英の「知覚処理方向の同一性」対「文法の語順の違い」に起因するものである。

本節の結論を述べよう。「モジュール性」の有無に関する議論は、適用のレベルと切り離して論ずる限り、基本的に不毛である。それでも仮にこの問題が依然としてくすぶり続けるとしたなら、それはもう「趣味の問題」や「流儀の問題」や「時代の流行り廃り」の問題なのであって、実質的な対立にはなり得ず、純粋に学問的なレベルにとっては周遍的な問題に他ならない。なお、ここでは「文法対文法外」のモジュールを中心に論じたが、「文法内モジュール」に関して、基本的な議論は同様である。また、「モジュール性」そのものに関して言えば、Fodor (1983)は基本文献となろう。

2. 生成文法と認知文法の得失

他の学問領域同様、文法理論に関しても（実に）多くの枠組が提案されてきた。歴史的に見れば、例えば伝統文法対構造主義言語学、構造主義言語学対生成文法⁽²⁾ という対立図式が指摘されることがあったし、歴史は繰り返すで、生成文法（解釈意味論）対生成意味論や生成文法対機能文法や生成文法対認知文法や生成文法対最適性理論⁽³⁾、さらには認知文法対関連性理論⁽⁴⁾ という対立図式も指摘されている、等々等々といった具合である（しかも、それぞれの枠組には種々様々の分派が存在する）。このうち、本論考では生成文法と認知文法（および一部関係文法）を組上にあげる。

関係文法の一発展形である Metagraph Grammar (MG) を奉ずる Postal (2010) によれば、生成文法は、それ自身の内部に様々の分派としての枠組を擁するものの、いわゆる「主流派」に限って言えば以下の道具立てを共有するという。⁽⁵⁾

(4) *Elements of the Chomskyan generative syntactic barrel* (Postal (2010 : (1.1)))

{abstract case, atomic node labels, atomic traces, binding principles based on c-command (Principles A, B, C), c-command, complex node labels composed of sets of feature specifications, configurational definitions of grammatical relations [...], constituent structure trees, copy traces, derivations, economy principles, empty nodes, feature checking, Greed, Last Resort, lexical entries, lexical rules, phrase structure rules, Procrastinate, reanalysis, Relativized Minimality, Subjacency, θ -roles, the A-over-A Principle, the Case Filter, the Chain Condition, the Cyclic Principle, the Doubly Filled Comp Filter, the Empty Category Principle, the Extension Condition, the Head Movement Constraint, the Least Effort Principle, the Minimal Distance Principle, the Minimal Link Condition, the Minimality Condition, the Opacity Condition, the principle of full interpretation, the principle of recovery of deletion, the Projection Principle, the Specified Subject Condition, the structure-preserving hypothesis, the Superiority Condition, the θ -Criterion, the Tensed-S Condition, the Visibility Condition, the *Wh*-Island Constraint, transformations, X-bar theory}

Postal は 道具立て (4) を共有する枠組のもつ難点を以下のように指摘する。

⁽²⁾ 高橋 (1995) 及びそこで言及されている文献参照。

⁽³⁾ 生成文法対最適性理論については、高橋 (1995) 参照。

⁽⁴⁾ 認知文法対関連性理論については、今井 (2015) を参照。

⁽⁵⁾ 「主流派」は、基底と表層とを変換という道具立てを仲介にして結びつける「多層アプローチ (multi-stratal approach)」を特色とする。これに対して変換という概念を援用しない「単層アプローチ (mono-stratal approach)」もある。本論考で論駁の対象とするのは、「多層アプローチ」の方である。

- (5) 「インプット→アウトプット」関係に基づく派生列（派生の履歴）を1文を構成する形式間に想定した上で、基底構造に対して理論的に必要とされる変換操作を順次適用してゆき最終的に表層構造を派生する、といった生成文法主流派に見られる「多層アプローチ」は、実は必要以上に無駄な操作を含むものであり、かつ、そのことを分析者自身が（変換操作の確認作業を実際に「逐一」「明示的に」行っていないケースが往々にしてあるという事情も手伝って、）明確に自覚してはいない。⁽⁶⁾

この論点は一理ある（cf. (9), (10)）のだが、しかし以下に述べる意味で、Postal 自身の枠組も「中途半端」な枠組に留まっている。

第一点。Postal が想定する枠組は「Metagraph」という「構造表示」を想定すれば変換操作は不要となると主張するものの、(1) の「原理群」の代わりに想定すべしとされる「原理群」が以下に示すように辟易する程の数に上る。

(6) *Principles of Postal (2010)*

the 2 Quace Lexical Assignment Schema, the 2 Quace Marking of 1 Arcs Condition, the 3 Object/2 Arc Local SuccessorI Condition, the 3 Object-Induced 2-to-4 Demension Condition, the 3 Object Lightness Condition, 4 Arc Forcing by 3-Object-to-2 Advancement Condition, 4 Object 2 Quace Condition, 7, 8, 9 Arc Condition, 9 Arc Clausal Condition, Basic English Periphrastic Passive Condition, Basic English Pseudopassive Condition, *Born* Lexical Condition, Clause-Internal Intersecting Denotation Condition, Comlement Clause Condition, Comlement Clause Demotion to 3 Qualification Condition, Congruent Local Successor_{III} Uniqueness Condition, Control Antecedence Condition, Coordinate Structure Constraint, Ctrl Arc Condition, Dangling Arc Erase Condition, English 2 Quace Condition, English 3 Object Demotion Condition, English 3-Object-to-2 Advancement Condition, English Adjectival Clause Relationa Poverty Condition, English Final 3 Object Lexical Ban Condition, English Final 5 Object Lexical Ban Condition, English Periphrastic Non-2 Object Passive Condition, English Prepositional Phase Control Condition, English Pure Adjectival Clause Viable 1 Arc Condition, English Synthetic Passive (Middle) Condition, etc, etc, etc.

第二点。それ以上の問題点として、「多層アプローチ」を否定している筈の MG が、依然

⁽⁶⁾ この点を「実感」していただくには、例えば佐藤・小林 (2013: § 1.2.2) で論じられている、生成文法流の具体的な「派生」法に対する批判的検討の件りを参照されたい。

として「削除」という「書き換え操作」を温存しており、その結果「R-graph (M)」というレベルの他に「S-graph (M)」というレベルも必要となってしまうという点が挙げられる。この点に関しては後述する (4 節)。

2.1. 受動文

2.1.1. 生成文法

データを説明する際の生成文法と認知文法の異同を概観するために、ここではまず受動文にまつわるデータに対する生成文法流の説明を採上げ、考察する。

客観性を可能な限り担保するために、まず初めに生成文法主流派という枠組の含意する得失、即ちその「利点」と「難点」と目される特徴を大雑把な形で洗い出してみる、という作業に着手することから議論を始めることにしよう。

生成文法のもつ最大の利点は、おそらくは、

- (7) 反証可能性を高めるという目標の下、明示的定式化に依拠する理論構築を行っている。

という点にあるかと思われる。生成文法出現以降この特徴が起爆剤となって、言語研究が生成文法の枠内でも枠外でも隆盛を極める状況が形成されるに至った、という点は基本的な点として認めてよいと思われる。

次に、生成文法（主流派）のもつ最大の難点は、おそらくは、

- (8) 言語の有する共通項に（のみ）着目し、共通項あり、説明を求むというテーゼを基本路線としてきた。

という点にあるかと思われる。このテーゼのお陰で（せいでは？）、生成文法主流派は、まず個別言語「内」のレベルでは、例えば「能動文～受動文」に見られる関係の解明に際し「知的意味の共有」という関係（のみ）を盾に両者の相違点に関してはこれをほとんど無視（ないし過小評価）してきた、という経緯がある。この点には後ほど具体例と共に立ち戻る。

また、個別言語「間」のレベルでは、言語間に見られる関係の解明に際し「普遍的特徴の解明」という一点に注力した上で多様な相違点に関してはこれを過小評価してきた、という経緯がある。むろん、パラメターという概念との抱き合わせで相違点＝多様性を把捉しよう

としてはいるのであるが、元々は英語圏発の枠組ということもあり、英語中心主義的発想法が色濃く残っている（例えば、語順の多様性に関する Kayne (1994) の分析等はその典型である）。

生成文法主流派は実はさらに根本的な難点も抱え込んでいる。それは「多層アプローチ」であるという点にまさに関わるものであり、(9) に示すように共時態に書き換え規則を想定しているという点である。（つまり、生成文法主流派はソシュールの立てた区別「共時態」対「通時態」を未だに真には理解していないという致命的な誤謬を抱え込んでいる、ということである。）⁽⁷⁾ この方式に対峙する「ひな形方式」に基づくテーゼを(10) に示す。

(9) 「共時態に通時態を混入させてしまう」枠組の誤謬（高橋 (1995)）

- i. 言語は常に変化するから通時態は変更規則を含まざるを得ないが、共時態に変更規則を認めてしまうと、「言語 L の文法 G の話者は、L の史的变化に伴い、時代が下るにつれて変更規則が増減し、G 獲得の困難度が増減する」という受容れ難い結論を回避し得ない。
- ii. また、「派生がある限度を越えて複雑になったり簡易になったりしたら、ある段階でしかるべき再編成が行われ、派生の簡素化や充実化が行われる」という救済策を考えても、今度は、適度の複雑度/簡易度の規則体系とはどんな内容の規則を何個含む場合かという間に答えねばならず、また「再編成過程」なるものの中身に関する具体的な理論（さらには規則の順序付けに関する理論）を打ち立てねばならぬという非現実的な課題を背負い込む。

(10) 「ひな形方式」に基づくテーゼ（抜粋）⁽⁸⁾

共時態（正式には文法内規則）のレベルでは「変更規則＝書き換え規則」という概念を援用して定式化を行ってはならない。

テーゼ (10) に基づく具体的な分析は 3 節で提示することにして、ここではまず生成文法主流派の分析法を提示しよう。以下の能動文と受動文とを考える。

- (11) a. He kicks the ball.
b. The ball is kicked by him.

⁽⁷⁾ 主流派にはさらに「破格な構造の想定」という誤謬も見られる (§ 2.2.1.)。

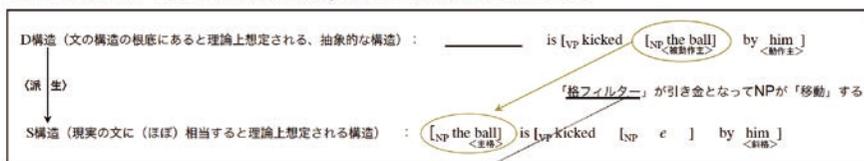
⁽⁸⁾ 詳細な作業原則は、<http://raspberrys.jp/TMwh.pdf> を参照されたい。

受動文 (11b) の生成文法主流派による分析は以下になる。(ここでは CB 理論 (Chomsky (1981)) の分析を中心に示すが、ミニマリストの分析でも「変換」という概念に依拠するという点では基本的に変わらない。)

まず、そもそも、GB 以前の古典的な枠組では上記「共通項」はまさしく「能動文から受動文を導く」という形で説明されたことがある (Chomsky (1957))。上述の「知的意味の共有」を盾に、能動文 (11a) と受動文 (11b) との「共通項」を把握すべく「(11b) は (11a) から派生される」と想定されたのである。ここにはまた、「能動文」の方が「受動文」よりも基本的で無標であるという想定事項も根底にあった。

しかし、さすがにこうした分析はやがて退けられた。(11a) — (11b) は確かに知的意味 (動作主が誰で被動作主が何か、等) は共有しているものの、そもそも「事態の把握の仕方」が全く異なっているからである。例えば、「まずいづれに視点を置いて事態を捉えているか」というレベルでの「意味」を異にしている。(この点に関しては実は認知文法他の陣営からの批判があり、生成文法の陣営も意識し出したという経緯がある。)そこで GB の段階では「共通項」の把握は「受動文をもう少し受動文寄りの基底形から導出する」という形に改められた。(12) の如くである。ここでは、高橋 (2008) に従い、GB 理論の抱える問題点と共に示す。(また、ひな形方式に基づく代案も一部先取りして示しておくが、ひな形の具体的な図式は 3 節で提示する。)

(12) a. 生成文法の GB 理論では、「受動文」The ball is kicked by him. の派生は概略以下のようなものとなる。



上の派生では、以下の点が仮定されている。

- a. 0 役割 (名詞句や前置詞句が持つ「動作主」「被動作主」等の意味役割) の関係は D 構造で表される。
- b. 抽象格 (名詞句が持つ「主格」「対格 (=目的格)」「斜格」等の格) の関係は S 構造で表される。
- c. 受動態の形をした動詞 (上例の is kicked) は後続の名詞句 (上例の the ball) に格を付与することができない。
- d. 「格フィルター」: 音形のある名詞句 (=発音される名詞句) には抽象格が付与されていないなければならない。

(12) b. 生成文法の GB 理論流の「受動文」The ball is kicked by him. の派生の問題点:

「受動態の形をした動詞 (is kicked) は後続の名詞句 (the ball) に格を付与することができない」(仮定 c) というのであれば、そもそも一休何故、当該名詞句は D 構造の段階で当該位置に入り込むことが許されていたのか?

「格フィルター」が引き金となって NP が「移動」する (仮定 d) というが、同じく、そもそも一休何故、当該名詞句は D 構造の段階で当該位置に入り込むことが許されていたのか?

「0 役割」は D 構造で付与され、抽象格は S 構造で付与される (仮定 a, b) というが、そもそも一休何故、S 構造では 0 役割を持たなくてよいと想定し、D 構造では抽象格を持たなくてよいと想定するのか?

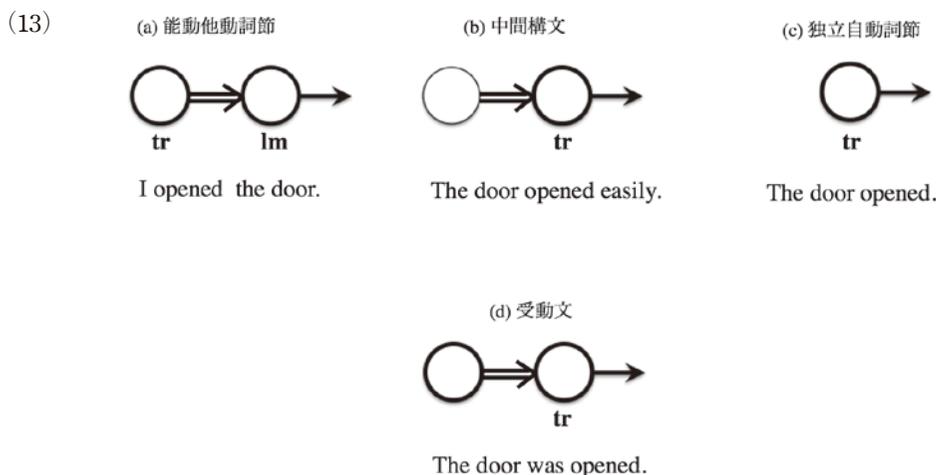
この 3 つの運動した疑問点に対する GB 理論の側の答は、「だからこそ仮定 a と b を想定し、それを前提に c と d を想定しているのである」というものである。しかしながら、こうした想定事項が必要となってしまっているのは、そもそも名詞句を「それ以上分解できない塊」と見做した上で、「その塊をそちらへと移動する」しかないと考えてしまっているからではないのか? しかし、そうした「移動」は二休手組であろう。名詞句をせつかく「0 役割」という面と「抽象格」という面とに因子分解したのであれば、その因子分解をそのまま面に活用すればいいだけではないのか?

3 節で、この線に沿った代案 (ひな形方式に則った代案) を示す。この代案では、名詞句を「それ以上分解できない塊」とは見做さない。名詞句は「0 役割」という面と「抽象格」という面とに因子分解され、各面が、統語上のしるべき位置と連結される (ひな形との相合) と想定する。この枠組では各面が統語上のしるべき位置と連結されるだけであるので、当然のことながら「移動」という操作は不要 (書き換え規則不要) となる。そして、音声実現のレベルでは、当該名詞句 (の 0 役割の面) が連結されている \ の時点で名詞句全体が音声的に実現され、\ の時点でほもや実現されない、というだけのことである。同時に、対応する能動文の場合は、\ (格付可能な位置) と \ (0 役割付可能な位置) が構造的に重なっているわけである。

また、「能動文の方が受動文よりも基本的で無標」という把握の仕方も実は一面的である。というのも、能動文と受動文を純粹に比較した場合はなるほど「能動文の方が無標」と言えるかもしれないが、「事態の把握の仕方」を考慮に入れた現実の場面では、「能動文の使用が適切とされる場面で能動文を使用するのは適切で無標と言えるが、受動文の使用が適切とされる場面で能動文を使用するのは適切ではないし無標とは言えない」し、同様に「受動文の使用が適切とされる場面で受動文を使用するのは適切で無標と言えるが、能動文の使用が適切とされる場面で受動文を使用するのは適切ではないし無標とは言えない」からである。つまり、「有標性」という概念には適用のレベルが少なくとも2つあり、純粹に理論レベルで云々すべきものと、現実の場面での使用というレベルで云々すべきものがある、ということである。この点を斟酌しない「有標性理論」は、現実には使い物にならないどころか、仇にさえなりかねないのである。

2.1.2. 認知文法

さて、生成文法主流派の受動文の分析に対して認知文法が異を唱えたのは、まさしく上述のような「事態の把握の仕方」を考慮に入れない非現実的な分析法に対してであった。例えば、Langacker (2008) は (13) に示すように、能動文と受動文を中間構文（これについては §2.2. で触れる）も含めたさらに広い視野の中に位置づけている。



つまり、中間構文は他動詞能動文（「動作主による力の行使+主題的プロセス」のプロファイル）と自動詞文（「主題的プロセス」のプロファイル）との中間に位置づけられ（「因果関係」を喚起はするがプロファイルはしない）、受動文は「動作主-主題的という相互作用全体」

をプロフィールしている，とするのである。⁽⁹⁾

さて，以上の点のみに鑑みた場合，(かつての)生成文法主流派流の受動文の分析に対する認知文法による批判は，文に対する現実的な見方という点では一応当を得ているとすることができる。しかしながら，ことはそう単純ではない。文に対する現実的な見方という点で，認知文法は依然として「中途半端」なままであり，全面的に現実的な見方とはなっていないからである。それは，以下のような類の間に対して認知文法が基本的に「黙して語らず」だからである。(14)を参照されたい。

- (14) a. He kicks the ball.
 a'. Does he kick the ball?
 b. The ball is kicked by him.
 b'. Is the ball kicked by him?

(14a)と(14b)とが「知的意味を共有」しつつも「異なった事態を表す」別個の文であるとする認知文法の主張が，生成文法主流派の(かつての)主張と異なり射ているとするのであれば(現に的を射ているのであるが)，では(14a)対(14a')，(14b)対(14b')の対立はどう説明するのであろうか。

よもや，(14a')は(14a)を基に派生されるのであり，(14b')は(14b)を基に派生されるのである，などと生成文法流に言い出すのではあるまい。(14a')(平叙文)対(14a)(疑問文)の対立は，能動文対受動文の対立とはベクトルの違いがありつつも，やはりお互いが別個の文として対立すると見做すのが筋であろう。さもないと，(14a')(平叙文)から(14a)(疑問文)を派生すると見做すなどとなれば，結局は「話者が何かを尋ねる気などなかった筈の形式から始まって途中で気が変わって何かを尋ねる形式に変換した」というようなことを理論的に主張することになってしまうからである。これはまさしく筋違いである。さらには，上で有標性に関して述べた点を応用した言い方をするなら，「平叙文の使用が適切とされる場面で平叙文を使用するのは適切で無標と言えるが，疑問文の使用が適切とされる場面で平叙文を使用するのは適切ではないし無標とは言えない」し，同様に「疑問文の使用が適切とされる場面で疑問文を使用するのは適切で無標と言えるが，平叙文の使用が適切とされる場面で疑問文を使用するのは適切ではないし無標とは言えない」のである。

このように認知文法は大局的な説明は得意であっても，いざ細かな形式上の操作となると

⁽⁹⁾ 大堀(2002)は受動文と周辺の機能領域についてさらに大局的な視野から論述している。

緻密さを欠くことが多い。さりとて、こうした問題の解決に際し、生成文法流に例えば「SAI」（ないしはそれに類する操作）で平叙文と疑問文を関連付けるといった手立てでお茶を濁すといった選択肢も賢明とは言えない。なんとなれば、この種の「書き換え操作」は、(7)に述べた意味で明示的ではあっても、(9)―(10)に述べた意味で「共時態に通時態を混入させてしまう誤謬」に他ならないという点で致命的だからである。⁽¹⁰⁾

以上本節（§2.1.）では、受動文の分析をトピックとし、生成文法の採るスタンスにも認知文法の採るスタンスにも共に瑕疵がある、という点を概観した。次節（§2.2.）では、同様の論点を、いわゆる中間構文をトピックにして概述したい。それを受けて、3節でひな形方式に基づく代案を提示することになる。

2.2. 中間構文

本節では、中間構文に対する生成文法と認知文法の説明法をトピックとし、双方の難点を指摘する。

2.2.1. 生成文法

中間構文（とりわけ、能動受動動詞である自動詞）の有する特徴は、概略以下の点にまとめられる（Fagan (1988), Keyser and Roeper (1984), Roberts (1987), Stroik (1992), 等）。

(15) 能格動詞（や非能格動詞）と異なり：

a. 命令法・進行相が不可である。

The floor waxes easily. vs. *Wax, floor !

*The floor is waxing easily.

b. 知覚構文に生起しない。

Bureaucrats bribe easily. vs. *I saw bureaucrats bribe easily.

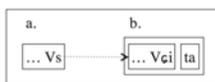
⁽¹⁰⁾ 吉村（編）（2003）は以下の図式を示し、生成文法は存在の不確かで抽象的な「規則」で活用現象を説明し、認知文法は現実のデータからプロトタイプとプロトタイプの拡張形より構成されるスキーマを抽出する形で活用現象を説明するとしている。しかし筆者に言わせれば、いずれも結局は「i」を「挿入」させる説明であり、同工異曲である（(3)の左からアプローチか右からアプローチかの違い）。因みに、高橋（1995）では、「書き換え規則」を想定することなく活用現象を説明している。

活用「貸した」等 [s] で終わる語幹：

生成文法：

vs. 認知文法：

i-挿入規則



- c. (基本的に) 様態副詞が義務的に生起する。⁽¹¹⁾

The floor waxes *(easily).

- d. 含意された動作主は非特定の行為者である (総称読み)。

Books about oneself never read poorly.

vs. *Books about himself/herself/etc. never read poorly.

他動詞文や受動文と異なり：

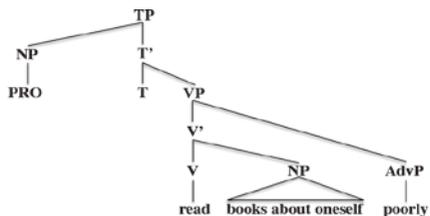
- e. 非特定の総称的行為者を含意する様態の副詞のみ可能である。

The light plugs into any household outlet.

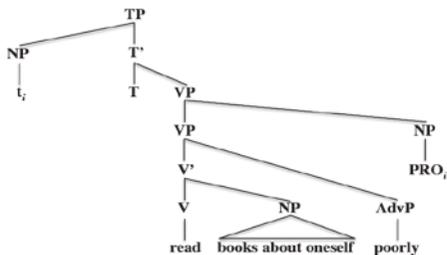
vs. *The light plugs in expertly.

さて、かかる特徴を説明する試みとして、生成文法の枠組に基づく Stroik (1992) は変換規則を援用した以下のような分析を提案している。

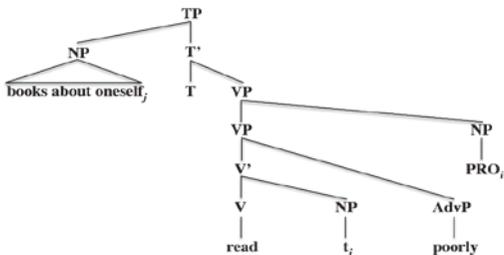
(16)



↓ 変換：総称読みの動作主「PRO」が主語位置から降格 (demote) し、VPに付加 ↓



↓ 変換：目的語の「books about oneself」が空の主語位置に移動 ↓



⁽¹¹⁾ ただし、後程補説で指摘するように、様態の副詞でなく再帰代名詞の目的語が来るケースもある。

ここで(16)に関して理論的な問題点を指摘しよう。まず、「PRO」は(15d)の「非特定の行為者（総称読み）である含意された動作主」を理論的に明示したものである。こうした要素を仮定すること自体は問題ないものの、問題は基底でTPのSPECの位置に置かれた後すぐさまVPに付加される形で「移動」とする点である。この移動規則という「書き換え規則」は、そもそもテーゼ(10)に抵触するものであるし、また動機付けとしては「PRO」に「oneself」の先行詞としての役割を担わせたいだけ（しかも基底でのみ）という（姑息な）手段を援用するものに他ならない。（そもそも、生成文法では「XP付加」ということを安易に言い過ぎる。）次に、その空いた主語位置に目的語の「books about oneself」が待ってましたとばかりにやはり「移動」する。これもまたテーゼ(10)違反である。とにかく生成文法は「書き換え規則」とりわけ「移動」が大好きである、というのがここでも窺える。⁽¹²⁾

いまひとつの問題点は、図(16)の真ん中の段階である。この段階では主語位置が空になっているが、英語は主語位置が空であってはならない言語の筈である。途中段階が破格な構造であっても「終わりよければ全てよし」と見做されるのが現行の生成文法なのであろうか。変ではないか。なお、生成文法で破格な構造が平気で許されるのはなにも途中段階に限ったことではない。§2.1.1.の(12a)で見た受動文ではそもそも初っ端（基底）から破格な構造が想定されている。始めや途中で破格であっても「終わりよければ全てよし」というのはどう考えてもご都合主義的な（暗黙の）前提である。破格な構造が始めや途中に紛れ込んでいてもいいという理論では詰まるところ「何でもあり」の強すぎる枠組であることを意味することになってしまう。因みに、例えばunreliableが*[[un-reli]-able]ではなく[un-[reliable]]であると分析されるとするの、*unrelyという動詞が存在しないから（松本他(1997: 12)）という論法ではなかったのか。それとも語レベルと文レベルとでは事情が違うとでも言うのであろうか。それも変な話であるし、仮に事情が違うとした場合、その事情とはいったい何なのだろう。

3節では、以上述べたような難点を一切含まない、ひな形方式に基づく分析を提示する。

2.2.2. 認知文法

認知文法の枠組での中間構文の分析には、Kemmer (1993) 等があるが、基本は§2.1.2.で述べた点と同様である。即ち、能動文、受動文、自動詞文、使役文等関連機能領域全体の中の位置付けという大局的な観点から卓見を述べているという利点はあるものの、疑問文や否定文との関連等細かな「操作」に関する詳細に関しては緻密な明示性を欠くという点が難

⁽¹²⁾ 補説に挙げた「Such problems solve themselves.」のような例も勘案するなら、「books about oneself」の「移動」はさらに怪しくなる。

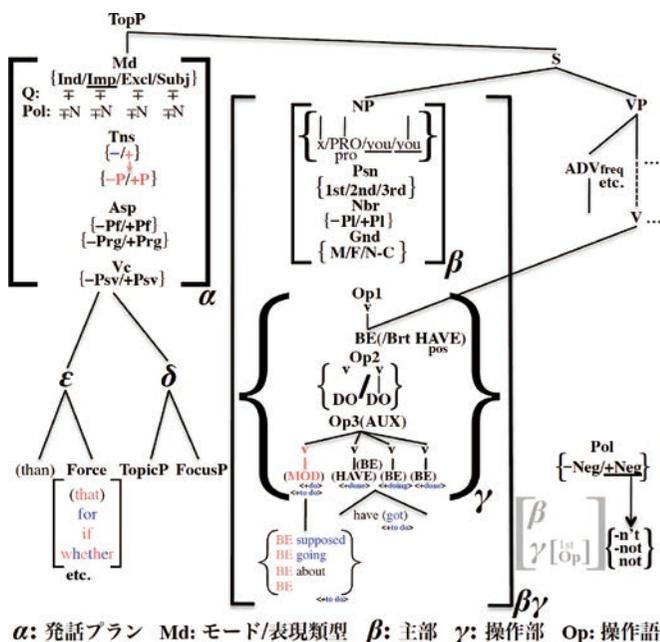
点となっている。即ち、生成文法流の (16) に見るような明示性は (良くも悪くも) 見られない。これでは反証可能性が低い理論構築 (cf. (7)) ということになってしまい、結局は理論的に歓迎されない枠組ということになる。

3. 代案：ひな形方式

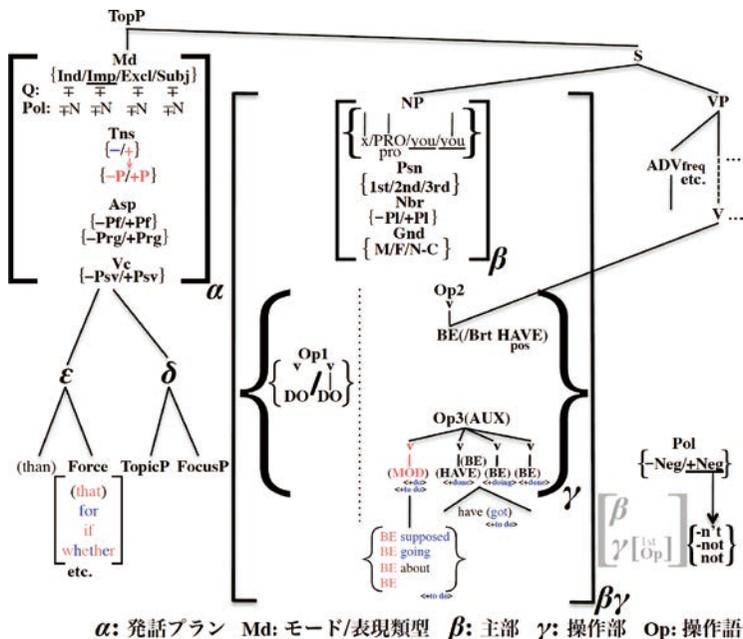
本節では、2 節で提示した生成文法・認知文法の枠組での受動文・中間構文の分析に対して、ひな形方式に基づく代案を提示する。

ひな形方式という枠組自体は筆者が 1988 より提唱している枠組であるが、本論考では統語部門にひな形方式を適用して論じた佐藤・小林 (2013) を基本的ひな形として想定することにする。ただし、佐藤・小林 (2013) では、改定すべきであるにもかかわらず論文提出日時に間に合わずに改定されないまま残された部分がある (<<http://raspberrys.jp/TMcomment.pdf>> に指導教員を務めた筆者からの「コメント」という形で問題点の指摘と代案とがアップしてある)。本論考ではその点も含めて彫琢した改訂版を以下援用する。(17a) が佐藤・小林 (2013) の版、(17b) が本論考での改訂版である。

(17) a.



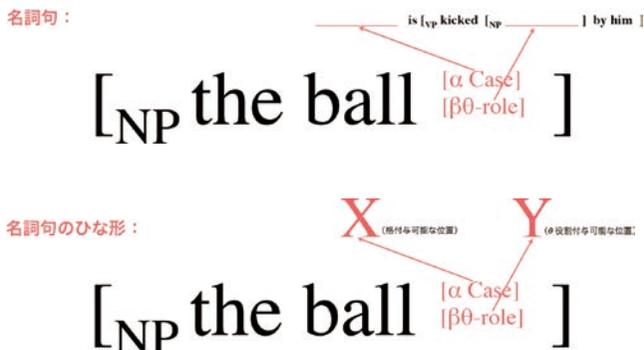
(17) b.



3.1. 受動文

ひな形方式での受動態の分析は、以下の通りである。受動文の場合、(17b)の「Md: モード/表現類型」(α)の中の「Vc: [+Psv]」が選択され、「操作部」(γ)中の「操作語」としては「Op3 (AUX)」中の右端の「BE」が選択されることになる。「移動」という「書き換え規則」は一切想定されない。あとはこの「文レベルのひな形」と以下の(18)に示す「NPのひな形」に則り、ひな形照合の操作が行われるのみである。(直感的に把握しやすいように、簡易的な動画を<<http://raspberrys.jp/np.html>>に上げておいたので参照されたい。)

(18)



さらに, (14a) (平叙文) 対 (14a') (疑問文) の対立もひな形方式では「書き換え規則」に一切依拠せずに説明が可能である。ひな形方式では, 疑問文は, (17b) 「Md: モード/表現類型」(α) の中の「Q: [+】 (=有標) と見做され, このとき「βγ」中の要素の拾い方が「γ→β」と「下から上へ」拾うことになるを考える。このことにより, 生成文法流「SAI」式の「書き換え規則」は不要となるのである。

3.2. 中間構文

ひな形方式での中間構文の分析は, 以下の通りである。中間構文 (15d) の場合, 「PRO」は最初から最後まで (17b) の「δ」の「TopicP」に留まり移動しない。また, NP「books about oneself」は, 「格」に関する側面である「主格」が「β」中の「NP」の「x」と連結線で結ばれ, 同時に「V」の目的語の位置 ((17b) では便宜上「...」で表記) に「θ役割」に関する側面である「被動作主」が連結されていると見做し, やはり移動はしない。因みに, 音声実現の段階では「x」の位置で一度発音されたら, 当然あとは目的語の位置では発音されないことになる。(なお, 目的語の位置でもだめ押し的に発音してしまった場合, それは「言い間違い」に対応する現象ということになる。こうした「言い間違い」現象は「移動」規則想定の根拠となる, とする生成文法でお定まりの論法はこれで「唯一の理論的帰結とする論拠」としては崩れ去ることになる。)

以上, 本節では, ひな形方式に基づく受動文・中間構文の分析を提示した。2 節で指摘した生成文法の難点(「書き換え規則」や「破格な構造」の想定)も認知文法の難点(「中途半端で非明示的な」定式化)も一切持ち込んでいない, という点に特に留意されたい。

4. 補 説

2 節では, Postal (2010) の MG が「削除」操作という「書き換え規則」を援用しているために「単層アプローチ」とは言えない, という点を指摘した。具体的には, Postal は以下の (19) のように表示している。それぞれ, 「Such problems don't solve easily.」「Such problems solve themselves.」に対応する(「one」は Stroik の「PRO」に相当)。図中の「尾部が 2 又に分かれた矢印」が削除操作を表している。これに対して, 本論考が則るひな形方式では「削除」という「書き換え規則」が不要なことは既に指摘した通りである。

翻訳の問題が出たついでに、もう一言。(21) の 3 文はどのように訳し分けたらよいか (cf. Jackendoff (1972: 332))。

- (21) a. Tom doesn't go to town very often.
 b. Not very often does Tom go to town.
 c. Very often Tom doesn't go to town.

ひな形方式に則った解答例は以下の通りである。

- (21') a. Tom doesn't go to town very often. 「文末焦点の原則」 + 「not'の方が広い作用域」
↓
トムはそれほど頻繁には街に出ないよ。
-
- b. Not very often does Tom go to town. 「文頭に焦点」 + 「not'の方が広い作用域」 + 「文末焦点の原則」
↓
それほど頻繁ではないんだよね、トムが街に出るのは。
-
- c. Very often Tom doesn't go to town. 「文頭に話題」 + 「very'の方が広い作用域」 + 「文末焦点の原則」
↓
これはけっこう言えることだけど、トムって街に出ないんだよね。
-

因みに、(21'b) の「Not very often」は (17b) の「 δ 」の「FocusP」に入っており、(21'c) の「Very often」は (17b) の「 δ 」の「TopicP」に入っているといた具合で、そのように意識をし、またそのように発話・聴取・翻訳するということになる。

さて、少々話題が逸れてきたので、この辺で筆を措くことにする。

参考文献

- Chomsky, Noam (1957) *Syntactic Structures*, The Hague: Mouton.
 ——— (1975) *Reflections on Language*, New York: Pantheon.
 ——— (1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris.
 Fagan, Sarah, M. B. 'The English Middle,' *Linguistic Inquiry* 19, 181—203.
 Fodor, Jerry A. (1983) *The Modularity of Mind*, MIT Press.
 今井邦彦 (2015) 『言語理論としての語用論——入門から総論まで——』, 開拓社.
 Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press.
 Kayne, Richard S. (1994) *The Asymmetry of Syntax*, MIT Press.
 Kemmer, Suzanne (1993) *The Middle Voice*, Typological Studies in Language 23, Amsterdam: John Benjamins.
 Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper, (1984) 'On the Middle and Ergative Constructions in English,' *Linguistic Inquiry* 15, 381—416.

- Lakoff, George. (1971) 'On Generative Semantics', in D. D. Steinberg & L. A. Jakobovits (eds.), *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*, 232—296, Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.
- Lightfoot, David (1976) *Language Lottery: Toward a Biology of Grammars*, MIT Press.
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』, 東京大学出版会.
- Postal, Paul M. (2010) *Edge-Based Clausal Syntax: A Study of (Mostly) English Object Structure*, MIT Press.
- Roberts, Ian G. (1987) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Dordrecht: Foris.
- Saeed, John I. (2009³) *Semantics*, London: Blackwell.
- 佐藤怜美・小林維奈 (2013) 「ひな形方式に基づく英語の文構造再考」, 東北学院大学教養学部総合研究. <<http://raspberrries.jp/sgkk.html>>
- Stroik, Thomas. (1990) 'Middles and Movement,' *Linguistic Inquiry* 23, 127—137.
- 高橋直彦 (1995) 「現代日本語の動詞の活用」, 『東北学院大学論集 (人間・言語・情報)』第 110 号, 東北学院大学 107—78.
- (2008) 「ひな形方式の適用可能性」東北英文学会 (日本英文学会東北支部) 第 63 回大会 英語学・英語教育部門シンポジウム「言語理論の進展とその応用—言語教育・自然言語処理を手がかりに—」(2008 年 11 月 24 日 東北学院大学土樋キャンパス) における発表原稿.
- 松本裕治・影山太郎・永田昌明・齋藤洋典・徳永健伸 (1997) 『単語と辞書』, 岩波講座言語の科学 3, 岩波書店.
- 吉村公宏 (編) (2003) 『認知音韻・形態論』, 大修館書店.

高橋直彦「生成文法？ 認知文法？ それとも…?」, 『東北学院大学教養学部論集』 第 172 号の
正誤表：

	誤	正
p. 79, l. 10 :	(1) の原理群	(4) の原理群
p. 84, l. 17 :	(14a') (平叙文) 対 (14a)	(14a) (平叙文) 対 (14a')
p. 84, l. 19 :	(14') (平叙文) から (14a)	(14a) (平叙文) から (14')
p. 89, 頁半ほど :	「Md: モード/表現類型」 (α)	「発話プラン」 (α)
p. 90, l. 11 :	「被動作主」	「主題」
p. 91, 図 (19) の下 :	(17a) が ^s (17b, c)	(20a) が ^s (20b, c)
p. 91, (20) の c :	($\exists x \forall y (L(x,y))$)	($\exists y \forall x (L(x,y))$)
p. 93, l. 5 と l. 6 の間に以下を追加 :		
	大庭幸男 (2011) 『英語構文を探求する』, 開拓社言語・文化選書 23, 開拓社.	
p. 93, l. 12 :	< http://raspberrries.jp/sgkk.html >	< http://raspberrries.jp/sgkk.html >